

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	麻生 将 (あそう たすく)
○学位の種類	博士 (文学)
○授与番号	甲 第 822 号
○授与年月日	2012 年 3 月 31 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
○学位論文の題名	近代日本のキリスト教会をめぐる社会・空間的排除に関する研究
○審査委員	(主査) 藤巻 正己 (立命館大学文学部教授) 河原 典史 (立命館大学文学部教授) 加藤 政洋 (立命館大学文学部准教授)

<論文の内容の要旨>

本論文は、当該の時代・地域において、主流社会にとって「異 (い) なるもの」として認知される特定の個人や集団もしくは施設が主流社会の支配的思想や規範、慣習から逸脱した存在であるとみなされたとき社会的空間的に排除されてきたという歴史的事実をふまえ、社会的諸事象に対して空間・景観論的観点から関心を払ってきた地理学は、どのように「異なるもの」への社会－空間的排除をとらえ、解釈すべきかを問うた研究である。

申請者は、「異なるもの」に対する排除は人類の歴史が始まって以来、世界中で生じてきた普遍的な現象であり、排除は普遍性、秘匿性、そして実存性の三つの性質を有すると認識し、排除に関わるこれら三つの性質を合わせて「排除性」と定義する。そして、「排除性」は時として景観に刻み込まれる (景観から読み解かれうる) ものであるとの観点から、イギリスの地理学者の D. シブレイがいう「排除の景観」論に導かれながら、1930 年代という戦時体制に移行しつつあった日本において発生したキリスト教会の排撃運動に対して、地理学的アプローチを試みたものである。

本研究が事例として採りあげたのは、岐阜県大垣市を拠点とする美濃ミッション、そして鹿児島県奄美大島のフランシスコ会に対する排撃運動である。これらのキリスト教集団は教育機関を設立するなど、それぞれの地域における社会的事業への貢献を通じて一旦は受容されたが、戦時体制への移行期において、国家神道や国体思想に対し「異なる」姿勢をとったために、当該地域社会の多様な主体 (アクター) が排撃運動を展開するに至った。そして、ときには排撃運動は、教会建物の破壊や他の施設への転用などの物理的実践を伴うものであった。

本研究は、こうした事象の事実関係を豊富な史資料を駆使しながら、米国の地理学者の E. ソジャによる社会-空間弁証法およびフランスの歴史学者 P. ノラの「(集合的) 記憶の場」論などの諸理論を援用し、景観に刻み込まれた排除性の考察、言い換えれば排除性が刻み込まれた「排除の景観」の地理学的探究をめざしたものである。以下、各章ごとの要旨を概観する。

第1章 問題の所在

本章では、人間社会が「異なるもの」を排除するという現象を地理学はどのように読み解くことができるのか、いわば「排除の地理学」の可能性を問うべく、相当分の頁を割いて先行研究の参照と、批判的検討が試みられている。

まず本研究の参照枠組みとして、シブレイによる「排除の景観」論、小口千明の「好まれない空間 (場所)」論が採りあげられ、それらの有効性ととも問題点について論証している。次いで、「異なるもの」に対する社会-空間的排除の探究、およびより適切な「排除の景観」論の確立にとって有用とみなされる方法論として、ソジャが提起した空間の「社会-空間弁証法」およびノラの「記憶の場」論が採択され、それらの有効性について論証が試みられる。そして、排除に関わる物理的空間と、地域社会のさまざまな行為主体 (アクター) 間で交わされる言説や、それらの間で共有されていく集合的記憶が複雑に関係しあうなかで、「排除の物語」がどのように構成されていくのか、さらに「排除の物語」がどのように「排除の景観」を生成しうるのかといった側面にアプローチする。本論文は、そこに「異なるもの」に対する「排除の地理学」的研究の意義をみいだそうとしている。

第2章 近代日本におけるキリスト教の排除とその背景

本章では、宗教史や思想史における研究成果をふまえ、国家神道や国体思想を背景とする近代日本の政治的・社会的状況が、本研究の対象となる近代日本のキリスト教会に対してどのような対応をせまったか、それに対してキリスト教会側がどのような反応をとったのかといった側面を中心に焦点を定めつつ、全体主流社会と「異なるもの」としてのキリスト教会とのせめぎあいについて俯瞰的説明がなされている。そして、そうした流れをふまえたうえで、明治期からキリスト教会に対する排撃運動が頻発し、さらに国家統制が強まりつつあった昭和戦前期の 1930 年代においては、日本各地で国家イデオロギーに敵対する「異なるもの」としてキリスト教団への糾弾、排撃運動が全国各地で激化するに至った経緯が、地理学的説明をまじえながら論述されている。

第3章 美濃ミッション事件における社会-空間的排除

本章では、1930 年代前半に岐阜県大垣市で発生した、美濃ミッションと呼ばれるキリスト教団の排撃事件である「美濃ミッション事件」を事例に、キリスト教会と地域社会との相互関係の変化について社会-空間弁証法の援用による考察を試みている。その結果、排

撃運動には地域社会の多様な集団（アクター）が関わっていたこと、新聞（地域メディア）が排撃言説を生産・媒介し、地域住民をして排除の実践を指唆する機能を果たしていたこと、しかし、美濃ミッションに対する諸アクターの言動は一樣ではなく、多様な言説や実践の複雑なせめぎ合いを伴うものであったことをも明らかにしている。

第4章 奄美大島のカトリック排撃事件における社会-空間的排除

本章では、第3章と同様の視点・方法を用いて、1930年代の奄美大島のカトリック教会に対する排撃運動の読み解きが試みられている。しかし、この事例では、カトリック集団が排除され後、残された教会建物を町役場に転用し、十字架に替えて日章旗を掲揚するという異質な経緯をはらんだ「排除の景観」が現前する、という前章とは異なる論点が提起される。そして、カトリック集団を排除したにもかかわらず、残された施設を転用（包摂）するという「異なるもの」に対する矛盾した行為は、排除した側の企図や行為の正当性を誇示し、地域住民に対しても集団的記憶の共有を強いたものである、との推論が展開されている。

第5章 キリスト教会をめぐる社会-空間的排除と排除の景観の形成

本章では、美濃ミッション事件と奄美大島のカトリック排撃事件との比較考察がなされたうえで、キリスト教会をめぐる社会-空間的排除の過程、事件当時に生きた地域住民によって構築された「排除の景観」の形成過程が、以下のようにまとめられている。

(1) 日常的な差別や忌避などの蓄積が底流をなしつつも、異なる集団に対する主流社会による排除は突発的に起こるのではなく、異なる集団によって主流社会の正義・正論に抵触、敵対する言動が表出されたとき、つまり排除を正当化する何らかの「事件」を契機として異なる集団への排撃、社会-空間的排除が生起する。(2) 言論・実践を通じて、排除には地域の多様な社会集団がさまざまな立場から関与する。その際、新聞などの地域メディアが諸アクター間の言動を促し、左右する媒体機能としての役割をはたす。(3) 排除に関わる諸アクターの言説と実践は一樣ではなくせめぎあうものであるが、結果として支配的勢力のプロパガンダが他を圧倒し、異なる集団の社会-空間的排除が完遂される。しかし(4) 異なる集団の象徴的建物が排除した側の正当性を表象するかたちで他の施設に転用される場合もある。

なお、本章では美濃ミッションと奄美大島におけるカトリック排撃事件のありようの差異に、本土中央部に位置する旧城下町の大垣と、「辺境」の奄美大島という、1930年代の日本国に位置づけられた両地域のロカリティの差異が関わっている可能性も指摘されている。

第6章 結論と今後の課題・展望

本章では、本論文全体の総括が行われ、排除性が日常的な人文景観に内在していること、

その排除性を読み取る事は十分に可能であること、その際に「社会－空間弁証法」や「記憶の場」をはじめとするいくつかの社会－空間概念が有効であり、それらによって現代社会においても「排除の景観」の析出や解読の可能性をあらためて確認している。しかし、「排除の景観」論をより確かなものにするためには、より多くの多様な事例を対象とした研究の蓄積とともに、「排除性」をめぐる議論のよりいっそうの精緻化が求められることを今後の課題としている。

<論文審査の結果の要旨>

本研究の特長は、これまで人文地理学の分野で（おそらくは他の研究領域でも）十分に関心が払われることのなかった、近代日本の主流社会から「異（い）なるもの」として眼差されたキリスト教集団を研究対象とし、そうした社会集団が、さまざまな行為主体（アクター）による言説空間の生成過程のなかで、どのように社会－空間的に排除されるに至ったのか、そのプロセスにおいて「排除の景観」を読み解こうとした点にある。その際申請者は、シブレイによる「排除の景観」論、小口の「好まれない空間（場所）」論、ソ ज्याが提起した空間の「社会－空間弁証法」的解釈を「排除の地理学」の中心理論として位置づけ、所期の課題について探究を試みている。また、M.フーコーによる「ヘテロトピア」概念の適用、ノラによる集合的記憶・「記憶の場」論、加えて人文地理学で再構成されつつある景観テキスト論や領域性概念に関わる所説を援用しながら、自身の研究枠組みをより深化させた点は、少なくとも日本の地理学界のみならずその他の諸学界においても稀有な試みであると考えられる。さらに、ある社会集団そのものに対する排撃に加えて、その社会集団が拠り所とする象徴的施設が、当該の時代の主流社会によって排除された後、どのように他の施設に転化され、意味の読み替え（排除の正当化）がなされていくのかという、新たな論点の提示はシブレイの所説を超えたものとなっており、新たな「排除の景観」論の展開が期待される。このように本研究は、「排除の景観」という人文地理学研究における新たな地平を切り拓こうとする、「解釈的人文地理学」の可能性を追求した意欲的な労作であるとみなすことができる。

しかし、本研究の学術的価値と完成度をより高めるために、敢えていくつかの問題点と今後検討を要すべき課題とを指摘しておきたい。第一に、本研究は、排除の普遍性を強調しているものの、申請者による事例研究が2件とやや少なく（類例については本論中、先行研究でとりあげられている事象・事例を数多く参照してはいる）、加えて事例研究対象がいずれも1930年代の日本という時代的・地域的に、また異なる集団としてはキリスト教集団に限定されていること。第二に、本研究を進めるにあたって一次史資料の批判的検討が必ずしも十分でなかったこと。第三に、今後は、本研究を足がかりに、キリスト教集団だけでなく他の類似集団の事例を蓄積し、「排除の景観」論のモデル化、概念・理論のよりいっそうの精緻化をはかりつつ、排除の歴史性・現在性を照射するようなダイナミックな空間論ないし景観論への展開が期待されることなど、研究方法上いくつかの問題点と課題

が散見された。

とはいえ、幅広い史資料の渉猟、とりわけ現地調査にもとづく一次史資料の収集によって得られた情報を組み合わせながら独自の言説空間を構築し、その上で「景観の解釈学」とでも称すべきアプローチの仕方によって言説空間へと分け入り、排除に帰結する社会空間的諸過程を浮き彫りにしていく行論は、学位論文にふさわしい文体と確かな手続きとがあいまって、読み応えのある内容に仕上げられている。排除のありようが「場所の履歴」に左右されるという結論を導き出してみせたことは、本研究が排除論一般にとどまらない、地理学的な場所・景観論の可能性を改めて示したものと言える。

さらに、口頭審査における質問やコメントに対する応答も的確であったことから、本論文が博士学位の授与に値する研究内容を持ち、少なくとも日本において排除の景観、排除の地理学という新たな研究地平を切り拓くものであると判断し、博士学位を授与するにふさわしい論文であるとの評価で一致した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公開審査は2012年6月16日(土)午後1時30分から4時まで、末川記念会館第2会議室で行われた。

審査委員会は、申請者が本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在学期間中に精力的に研究活動を進め、歴史地理学会誌『歴史地理学』および人文地理学会誌『人文地理』にそれぞれ1論文ずつ掲載されるなど、日本の地理学界を代表する学会から評価を得たこと、また本学の人文学会誌『立命館文学』にも論考が掲載されていること(これらの掲載論文が本論文の一部を成している)、また、公開審査における質問やコメントに対して的確な応答を行ったことから、申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。また、本博士論文の構築にあたっては英語論文を援用するとともに、上記の『歴史地理学』・『人文地理』に掲載された論文には英語による要旨も添付されていることから、本論文提出者が外国語(英語)能力を十分に備えていることも確認できた。

以上の点を総合的に判断し、本論文が、本学学位規程第18条第1項にもとづき、「博士(文学 立命館大学)」の学位を授与することが適当であると判断する。